ネパールの風　第３号

2020 年 7 月　発行責任者　小松原繁樹

コロナに負けずに　さらに絆を深めましょう！

ネパール交流市民の会が国際協力機構（JICA）の協力事業として、ネパール・ポカラ市で５年間に亘り手掛けていました「母子保健プロジェクト」が多くの皆様方のご協力により一区切りをつけようとしております。この５年間の活動により現地の母子保健の環境改善が図られ現地で病院の認知度も上がり出産数も増えました。また、本邦研修を通して伊南地域の人とネパールの人との民際交流や帽子プロジェクトなど様々な絆を築く事が出来ました。今は世界中に蔓延している新型コロナウィルス感染症により、国を超えた行き来が出来ない中でも WEB を利用して現地の環境改善に取り組んでいます。

私たちは、この５年間でお互いに築き上げてきたものをより良いものにするために今後もしっかりと取り組んで行きます。これからもよろしくお願いします。

ネパール交流市民の会会長　小松原繁樹

❤心強いプロジェクトの仲間たち❤

2020 年 2 月にポカラ市で草の根技術協力事業の報告会と終了式を開催し、日本から 12 名の方も参加されました。みなさん、母子友好病院を訪れ、日本からの愛情があちこちにみられることに驚きの声。例えば入口のホールには、駒ヶ根市の小学校や団体からの寄付金でできたキッズコーナーがあり、天井からは吊るし雛飾り、壁には中学生が訪れた時に作ってくれたアート作品や中央アルプスのポスターなどが病院を明るくしています。伊南昭和病院のナース服を来たスタッフが何人もいて、病棟では黄疸治療用の帽子や産後を快適に過ごすための下着が贈られていて実用的と喜ばれています。お母さんたちに人気なのは、県内の多くの方が編んでくださった毛糸の帽子や六つ花の飾り、折り鶴など手作りのプレゼントです。技術面では、産前産後の保健指導、性教育、乳房ケアなど上伊那の保健医療者の方々からの５年に渡る協力が現地に根付き始めているのがよく分かります。

「民際＝民と民との協力・交流」が広がっていった５年間、ネパールでも日本でも本当に良い出会いに恵まれ、私自身も幸せな瞬間の連続でした。皆様に心より感謝申し上げます。これからもこの民際力で、ネパールと日本がもっともっとハッピーになっていきますように・・・。

<プロジェクトマネージャー　北原照美>

＊コロナ禍において妊産婦のおかれる環境が悪化しており、
現在、プロジェクトを延長して活動すべく計画中です。

プロジェクト第2フェーズ　間もなく終了！

初めて駒ケ根へ研修に来た時には、とても控えめな彼女たちだった。
それから何回か病院を訪問し出会う度に、彼女たちの行動に、話し方に責任と自信があふれてくるのを感じて来ました。
このプロジェクトを通してこんなに魅力的なネパールの女性が育ったこと、スタッフの皆さんの努力の賜物と心より拍手を送りたい。

フェーズ２の終盤は、今までの実践の定着が活動の中心となりました。活動の柱は２つ、地域での女性保健ボランティアの保健指導能力向上と、母子友好病院内での産前産後ケア：妊産婦保健指導と産後のお母さんへの乳房マッサージの普及でした。保健ボランティアさんにはフォローアップ講習会の実施と、地域での母子保健指導に役立ててもらえる携帯式の教材を進呈、家庭訪問の時に持ち歩いていただいています。また、病院内では看護スタッフへの産前産後ケアトレーニングを終え、１月からプロジェクトスタッフが看護スタッフの指導役に付いて、マッサージを行っています。こうした動きが発展し、５月には病院内に産前産後ケアユニットが正式に設置されました。「友好病院のケアがいいから」と評判を聞いてお産に来られる方も増え、地域と病院が両輪となったサポートで、妊娠期から産後までをお母さん方が安心・安全に過ごせる地域となりつつあります。

７カ月余りの駐在中、ポカラでは皆がプロジェクトに強く信頼を寄せていることを実感させられました。２月の終了式には、対象地域に 70 人いる保健ボランティアさんのほとんどに出席いただいたこともその証の一つです。また、一緒に働いたプロジェクトスタッフたちは期待に応え、今や病院のケアの質向上に欠かせない人材となりました。こうした素晴らしい成果は、20 年来の友好関係を元に、関わり続けてくださった方々の思いの上に築いてきた、揺るぎない信頼の賜物です。私も関わらせていただいたことに感謝と誇りがあります。大切に思う人たちが駒ケ根に、ポカラにいる。その思いを原動力としてプロジェクトがさらに発展し、未来に繋がっていくことを願っております。

<母子保健専門家　米田恭子>

高梨選手　ポカラ国際マラソン優勝！

2019年信州駒ヶ根ハーフマラソン優勝の高梨良介選手。２月15日に開催されたポカラ国際マラソンに招待され、２時間 26 分 51 秒の大会新記録で見事優勝した。

プロジェクト終了式に参加した市民の会のメンバーや JICA 調査団も沿道で声援を送った。高低差が大きく、悪路のコースに苦戦したが、右手を上げ力強くゴールした。ネパールの選手や応援団からも大きな祝福を受けていた。高梨選手の活躍は、駒ヶ根市とポカラ市の友好の絆を大いに深めることになった。

民際プレゼント

この５年間で日本からたくさんの出産祝いの手作りプレゼントが、ポカラの母子に手渡され、多くの方が喜びの声を口にされています。

【ウサ病院運営委員長】

日本からの毛糸の帽子のプレゼントを通して母親の出産という偉業をねぎらい、祝福することで、母親の後々の子育ての自信につながっています。小さな帽子ですが大きなマヤ（愛情）でそのもつ意味はとても大きいと感じています。

【プレム（元）院長】

草の根事業は保健のプロジェクトですが、市民レベルの友好・交流が大きく広がった期間であったといえます。このように友好とサポートが息づく病院はネパールで非常に珍しいです。コミュニティ病院から公立病院へと変わりましたが、この素晴らしい独自性は今後も継続していってほしいと願っています。

【サビタプロジェクトオフィサー】

布製の花、毛糸の帽子、（折り）鶴など様々な形のマヤ（愛情）が絶え間なく届いていることに心から感謝しています。私たちのことを思い続けてくださる方がいると感じられることがどれほど大きな勇気や希望を与えてくれるか計り知れません。

ネパールの吟遊詩人GANDHARBA（ガンダルバ）来駒！

10 月 26 日から 28 日にかけて、ポカラ駒ヶ根母子友好病院（コマガネホスピタル）のあるポカラ市 16 区（バトレチョール）からネパール伝統音楽楽師団のガンダルバの皆さんが来駒し、10 月 26 日の「こまがね大使村まつり」前夜祭と 10 月 27 日の「こまがね国際広場」で本場のネパール伝統音楽の音色で観客を魅了しました。バトレチョールは現ガンダキ州議会議員で駒ヶ根市とポカラ市の友好都市協定を結んだポカラ市前市長のクリシュナ　タパさんの生まれ育った地域で、ガンダルバの街でもあります。音楽家でもあるタパさんは、長年、駒ヶ根でガンダルバの演奏会を開きたいとの夢があり、今回実現しました。駒ヶ根入りする前には池袋でもライブを開催し、大盛況であったとのことです。

【来駒したガンダルバの皆さん】

ダン　バハドゥール　ガンダルバさん（サーランギ）

ビベック　ガンダルバさん（マーダル）

プラティック　タパさん（ギター）

Q．ガンダルバってどんな人？

A．ネパールのジャート（≒カースト）の一つ。神話の時代、天女が躍るための演奏をしていたと伝えられています。歌と演奏を生業としています。

Q．ガンダルバが持っている楽器は何？

A．「サーランギ」という弦楽器と「マーダル」という小太鼓です。

＜ガンダルバの来駒のためにご寄付をくださった皆さん（順不同）＞

小松原繁樹様、竹原泰世様、増澤愛子様、窪田雅則様

小松政文様、加治木今様、米山久之様　　ありがとうございました。

コロナ禍でネパール隊員一時帰国

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大で、世界各地に派遣されていた JICA 海外協力隊全員が一時帰国を余儀なくされました。現在、駒ヶ根に一時帰国されているネパール隊員お二人に自身の活動のこと、ネパールでの生活のこと、現在の思いなどを語っていただきました。

2019 年度２次隊　丸山茜　公衆衛生

ポカラから車で東に約 1 時間半行ったところにあるダマウリと言う街に派遣されて１か月が経とうとしていた。信頼できる大家に恵まれ、職場の仲間からはアフター５にカジャ（軽食）屋に誘われ、重大な任務である手洗い指導も実施することができ、楽しく充実した日々を過ごしていたそんなある日、日本への緊急帰国が決まった。

ダマウリを立つ前夜、私はダマウリ在住の元隊員の家でダルバードを食べていた、ちょうどその頃、ネパール政府が国内の移動に制限をかけると発表した。

翌朝、大家家族に見守られながらカトマンズ行きのバスに乗りこんだ。カトマンズまで車で移動できる最後の日だった。

カトマンズに着いてみると、街は外出制限の影響から店はバンダ（閉店）しており、先輩は「まるでゴーストタウンのようだ」と言っていた。

ネパールがこんなことになるなんて。

その後、荷物の梱包などで慌ただしかったがＪＩＣＡが確保した飛行機で帰国した。

帰路、ネパールがロックダウンを開始するとの情報を得た。まさにギリギリのタイミングでの出国だった。

帰国してからは、ネパールに染まりきってしまった価値観が私を苦しめた。

ネパールでは「How are you?」の代わりに「カナカヌバヨ？」と言う。直訳すると「ご飯食べた？」の意味なのだが、帰国後の私は、「どうして誰も私に『カナカヌバヨ？』って聞いてくれないの？」と錯乱した。

奇しくも今年はＪＩＣＡ海外協力隊ネパール派遣 50 周年。ネパール地震の時も途絶えることのなかった派遣の歴史が、公衆衛生上の世界的危機に晒され、中断せざるを得ない状況にある。

私にとって第二の母国とも言えるネパールの為に、今、私ができることは何だろう。

いつか戻るその日の為に、しっかり準備をしなくてはと自分を引き締める日々を過ごしている。

2018 年度３次隊　宮本春香　環境教育

ナマステ。

2018 年 3 次隊でネパールのパナウティという、首都カトマンズから車で東に 2 時間ほどの市に環境教育隊員として派遣されていました。14 ヶ月をネパールで過ごし、コロナウィルス感染症の影響で 3 月下旬から日本に一時帰国しています。

研修会で説明する宮本さん

ネパールではパナウティ市内の学校を巡回し、「3R」や「ゴミをゴミ箱に捨てること」などを中心に授業を行ったり、女性を対象にゴミを減らす為に既存のプラスチック製品を利用せずに代替品を作製したり、プラスチックを再利用して、ネパール式の座布団を作ったりする研修会を行うなどの活動をしていました。

私の任地パナウティは首都カトマンズ郊外に位置するものの、自然豊かで広大な畑が辺り一面に見渡せますとおり、パナウティ市民の主な生業は農業です。また、歴史的な寺院もあり、旧市街地域のレンガ造りのネパール建築物は魅力的であり、たくさんの観光客が訪れます。

ネパールに赴任して間もない頃は戸惑うことも多かったですが、ネパールの生活に慣れてくると 365 日変わらない食事のダルバート、挨拶代わりの「カナカヌバヨ(ごはんたべましたか？)」。雨が降ると泥だらけになる道。これでもかというほど人が乗っている公共バス。どんなに遠くても歩いて出掛けた活動。道中には常に初めて出会う最高の景色と温かく出迎えてくれるネパールの人達がいました。時間がゆっくりと流れ、見知らぬ人にでも「お茶飲んで行きなよ」という人懐こいネパールの人々。今はその全てが恋しいです。

任期 10 ヶ月を残しての一時帰国は正直「志半ば」という言葉がぴったりです。継続して行っていた活動もあり、協力してくれる人も増え、活動も軌道に乗りつつありました。帰国を余儀なくされ、悔しくて落ち込むこともありましたが、今、日本に居て出来ることを探して活動しています。

いつかコロナが収束し、大好きなネパールに帰れる日が来ることを信じて、日本国内での活動を頑張りたいと思います。